

スノッブのなにが悪いのか

松永伸司

1. 導入

1.1. 用語の整理

スノッブ snob : 俗物。人を指す。

スノビズム snobbism : 俗物根性、俗物性。人の傾向性または事柄の性質を指す。「スノバリー snobbery」もおおよそ同義。

スノッブ的判断 snobbish judgment : スノッブがしがちな正当でない美的判断。

美的判断 aesthetic judgment : 美的価値や美的性質を対象に帰属すること¹。対象は芸術に限らない²。正当な美的判断は美的経験にもとづいてなされる³。

個人的趣味の判断 judgment of personal taste : 対象に対する好き嫌いの表明。理由づけを求められることがないという点で、美的判断とは区別される⁴。この発表では扱わない。

1.2. スノッブとは

古典である、伝統的である、高級である、高尚である、有名な批評家が良いと言った、流行りである、等々の事実それ自体に、美的判断が動機づけられることがある。この種の判断をしがちな人々は「スノッブ」と呼ばれ、その傾向性は「スノビズム」と呼ばれる。

スノビズムのあり方は、権威主義的なものだけではない。主流やエスタブリッシュメントに反している（つまりカウンターやオルタナティブである）という事実それ自体に美的判断が動機づけられることもまた、スノビズムの一種だ。

¹ 美的判断は、評決的美的判断と実質的美的判断に分けられる (Sibley 1965/2001: 33-34; Zangwill 1995)。前者は純粋に評価的な美的性質（たとえば美的良さ）を対象に帰属すること、後者は記述的な側面を含む美的性質（たとえばげげしさ）を対象に帰属すること。高田パートも参照。

² 「美的」は「芸術的」を意味しない。この発表では、芸術的判断に関わる諸問題——判断の正誤、適切な芸術的カテゴリーの帰属など——は基本的に扱わない。もちろん、美的な事柄の中心的な事例が芸術の領域にあることも否定しない。

³ 美的価値、美的性質、美的判断、美的経験、美的概念、美的述語といった関連概念（まとめて「美的なもの the aesthetic」と呼ばれる）のうちのどれを基礎的な概念とするかについては諸説ある。美的なものの本性については、この発表では問題にしない。

⁴ 美学プロパーでない論者が「美的判断」を問題にする際に、両者が混同されることはままある。両者の区別に気を使っている例として Young (2017) の各論文を参照。

1.3. スノッブの例

Kieran (2010) からスノッブの例をいくつかとろう。

「イリー」ブランドを良いコーヒーのしるしだと思っているコーヒー飲みを考えよう。この人はあたりのカフェを探し回って、このブランドが使われているところにだけ行く（そしてスターバックスには行かない）。この行動にはすでにスノバリーの気があるが、鑑賞の対象がコーヒーの味であるかぎり、必ずしもスノバリーではない。一方、これと同じ行動をしつつ、コーヒーの鑑賞が〔味ではなく〕社会的な理由に動機づけられている人がいたとしよう。この人は、それがイリーのコーヒーであるというまさにその理由でコーヒーを鑑賞する。なぜそうするかというと、この人は、自分がそのブランドに結びついた人種でありたいと望んでいるのだ。(Kieran 2010: 243)

アートギャラリーはつねづねステータスの競い合いをしており、客が特定のアーティストの作品を売るのに「ふさわしい人物」かどうかをこっそりと（場合によってはあけすけに）判別している。(Kieran 2010: 246)

文学、演劇、ポップミュージック、食べもの、ワイン、インテリアデザイン、ファッションなどのレビューには、共通して〔社会的な〕優越性の判断が見られる。たとえば、ある種の量産品を相手にしないとか、田舎者の趣味や時代遅れの様式について上から目線で語るとかだ。(Kieran 2010: 246)

これは自意識過剰なハイブロウの世界に限られた話でもない。トークショーか何かで、司会者が特定のポップバンドとそのファンをしたり顔でほめかせば、観客席からは心得たようにクスクス笑いが起きる。おそらく、観客は「あの人たち」のタイプをわかっていて、かつ彼らに優越していると感じているのだろう。(Kieran 2010: 246)

人々は、次は何が来るとか、何が流行りだとか、何がもう終わったとかを知ることによって躍起になる。なぜそうするかというと、「通 in the know」になることによって自身の優越性を感じたり示したりできるからだ。(Kieran 2010: 246)

1.4. スノッブの問題

スノッブに関する美学的な問題はいくつかある。

- スノッブであるとは、正確にはどのようなことなのか。
- スノッブ的判断と正当な美的判断は、実際に判別できるものなのか。
- スノビズムはわれわれの美的実践のなかで悪徳と見なされるが、それはどんな悪さなのか。
- スノビズムは擁護不可能なものなのか。

この発表では、このうちのとくにスノビズムが擁護不可能なものかどうかという問題を取り上

げ、結論としてスノビズムを部分的に擁護する。この問題設定は、Matthew Kieran (2010) の議論をベースにしている。それゆえ、次の節ではまず Kieran の議論を大まかに紹介し、そのうえであらためてこの発表の問いを示す。

2. Kieran の議論

2.1. スノップの特徴づけ

Kieran はスノップ的判断を次のように特徴づけている。

スノップ的な判断または反応は、次のようなものだ。x の美的対象としての価値の判断に関わる S の鑑賞活動において、美的に関連しない社会的特徴が因果的な役割を果たし、それゆえ、それがどのように生じるかが〔……〕なんらかの個人または集団に対して優越していると感じたい（または優越しているように見せたい）という S の動機の観点からより根本的に説明される——このような判断または反応だ。(Kieran 2010: 244)⁵

Kieran は明確化していないものの、この特徴づけは次の2つの要素に分けられるだろう。

- a. **美的無関連性**：対象が持つ美的に関連しない特徴が美的判断に影響していること
- b. **社会的優越の動機**：他人に対する自分の社会的優越を動機にして美的判断がなされること

Kieran の特徴づけによれば、両者は「a になってしまうのは b であるから」という関係にある。a と b の区別は、あとあとこの発表の議論に効いてくる。

2.2. スノップ的判断の不当さ

Kieran によれば、スノップ的判断は、美的判断として信頼できないというだけでなく、そもそも美的判断としての正当性を欠いている。スノップ的判断が不当な美的判断であるのは、不適切な理由にもとづいて対象に反応し、判断を下すからだ。スノップは、社会的優位を得たいがために、美的に関連しない特徴を美的判断の材料にしてしまう。

Kieran は、スノップ的判断の不当さを説明するために、偏見を持った判断とのアナロジーを使っている。たとえば、ある人の能力についての判断が、その人の人種や社会的身分に対する偏見にもとづいて行われるとしよう。この場合、その判断は不適切な理由でなされており、正当性を

⁵ わかりにくい訳にしかできなかったため、原文を載せておく。なお訳で一部を省略したのは、単純に挿入句が訳しづらかったため。“A snobbish judgement or response is one where aesthetically irrelevant social features play a causal role in S's appreciative activity in coming to judge the value of x *qua* aesthetic object, so that how they are formed, along with any concomitant rationalization, is explained more fundamentally in terms of S's drive to feel or appear superior in relation to some individual or group.”

欠いている。ネガティブな偏見の場合もポジティブな偏見の場合も、この点は変わらない。スノッパ的判断にも、これと同じことが言える (Kieran 2010: 245)。

Kieran は、「美的に関連ある特徴」が何であるかについて明確に述べていないが、少なくとも対象の直接経験を通じてのみ把握できる性質がそこに含まれていなければならないのは確かだろう⁶。そして、スノッパ的判断に影響を与えるたぐいの特徴——ブランド名、作者名、値段、他人の評価など——は、ふつう当の対象を直接経験しなくても知ることができるものだ。

2.3. スノッパ的判断と正当な美的判断の見分けの難しさ

Kieran は、以上のようにスノッパ的判断の特徴づけとその不当さを示したうえで、実際のところ、正当な美的判断とスノッパ的判断は、内省的に見分けが難しいと主張する (Kieran 2010: 248-250)。議論を再構成すれば以下の通り。

- ある対象の鑑賞経験を通じて快を得ることは、その対象を美的に良いものだ判断する理由を部分的に与える⁷。この理由は、条件つきで取り消し可能 *defeasible* なものだ。鑑賞者が適切な知識や識別能力を持っていなかったり美的に関連ある特徴をわかっていなかったりする場合は、たとえ快が生じていても美的判断の理由としては認められない。
- しかし、われわれは、鑑賞経験において自分が感じる快が、適切な知識と能力のもとで対象の美的に関連ある特徴から生じたものなのか、それとも美的に関連しない経路から生じたものなのであるかどうかをふつう内省的に判別できない。実際、われわれの判断や反応が、われわれ自身がまったく意識していない要因を持つということはよくある。単純接触効果などはわかりやすい例だ。あるいは、同じワインの色やボトルラベルがちがうだけで、多くの人が味がちがうという判断をしてしまうという実験結果もある。
- 細かい知覚的な識別能力が要求されるような複雑さが増せば増すほど、無意識の物の見方の影響を受けやすくなる。そして、われわれの美的実践の目的は、まさにそうした複雑な経験を生み出すことにある。それゆえ、この問題は、美的な領域にとりわけ顕著に見られる。

Kieran によれば、両者の見分けは、内省レベルで難しいだけでなく、外見レベルでも難しい (Kieran 2010: 250-252)。

- これは、ほかの領域と対比すればわかりやすい。たとえば、数学的判断の正当性は、数学者

⁶ いわゆる美的知識の直面原理 *acquaintance principle* は、この直観を前提にしている。われわれの美的実践では、伝聞のみによる美的判断はふつう正当なものとして認められない (とはいえ、これには諸説ある。Robson (2012) を参照)。逆に、正当な美的判断は対象の直接経験を通じてのみ得られる性質だけにもとづいてなされなければならないという主張も強すぎる。どういうカテゴリーのもとに見るかによって対象の美的性質は変わるが (Walton 1970)、その対象に適切なカテゴリーがなんであるかは必ずしも直接経験によってのみ把握すべきものではない。

⁷ 美的価値を少なくとも部分的に快の観点から特徴づける考えは、ごく標準的で伝統的なもの。オルタナティブのひとつは高田パートを参照。

の内面に左右されない。モテることを究極目標にして得られたものであろうが、数学それ自体が好きで得られたものであろうが、数学的に適切な理由にもとづいているかぎり数学的知識としては変わりがない。そして、それが適切な理由にもとづいているかどうかは、外見的に（たとえば推論規則に従っているかどうかで）簡単に判別できる。

- 一方、美的判断は、基本的に一人称的な経験のあり方によって正当化されるものなので、三人称的なふるまいに関する公共的な規範はない。われわれは、他人の美的判断の正当性を疑うための材料を明確には持っていない。結果として、スノッブは人の目を簡単にごまかせてしまう。

2.4. 美的判断の正当性に対する懐疑論

まとめると次の通り。

- スノッブ的判断は、美的判断としての正当性を欠く。
- スノビズムは、美的領域に蔓延している。
- 自分あるいは他人がスノッブ的判断をしているかどうかを見分けることは難しい。

Kieran によれば、これらが組み合わさると、美的判断の正当性にとって根本的な問題が生じることになる。つまり、「任意の美的反応または美的判断について、われわれはそれが正当化されているかどうかを知らない」ということになってしまうのだ。美的判断の正当性について、良くて不可知論、悪ければ懐疑論をもたらすおそれがある（Kieran 2010: 252-253）。

Kieran は、この美的懐疑論に対して、徳理論の観点からの応答を試みている。とはいえ、この発表では、Kieran の問題を継承しつつも、Kieran とは別の観点からの応答を検討したい⁸。

2.5. 問題設定

以下、この発表の問いを示す。

仮に、Kieran が言うように、スノッブ的判断と正当な美的判断をわれわれは原理的に見分けられないとしよう。一方で、健全な美的実践にとって害のあるふるまいと害のないふるまいの区別をわれわれは求めているし、少なくとも部分的にその区別を実際に行っているように思われる。したがって、次の問いについて考えるべきだろう。

⁸ 長門（2016）もまた、Kieran の議論を踏まえつつ、美的実践に対するスノビズムの脅威に触れている。長門の見解は、「私たちにとってスノッブの存在以上にスノッブという概念があること自体がかなり危険な帰結をもたらしている」というものだ。スノッブという概念があるおかげで、われわれは、スノッブと見なされるのを避けたいがために、美的な論争を慎んでしまう。あるいは、その概念があるおかげで、スノッブとは見なされない素朴なふるまいを、まさに優位を競い合うスノッブたちがとるようになってしまう。この発表は、この長門の懸念に直接応答するものではないが、スノビズムを部分的に擁護することで、スノッブに見なされまいとする行動を抑制するものになるかもしれない。

問い：正当な美的判断とスノッパ的判断の区別に訴えない仕方で、健全な美的実践にとって害のあるふるまいとそうでないふるまいの区別をつけることは可能か。

この発表の残りではこれを論じるが、結論を先に述べておく。

答え：スノッパのなかにも擁護可能なものとそうでないものがあり、かつ、両者は行動の観点からある程度区別できる。

以下、スノッパの擁護可能性を示したうえで（3節）、害のあるスノッパとそうでないスノッパを区別するための外見的基準を提示する（4節）。

3. スノッパは成長する

Kieranによるスノッパ的判断の特徴づけの2つの要素を再度確認しておこう。

- a. **美的無関連性：**対象が持つ美的に関連しない特徴が美的判断に影響していること
- b. **社会的優越の動機：**他人に対する自分の社会的優越を動機にして美的判断がなされること

ここで、aを満たさない美的判断を「健全な美的判断」と呼んでおく。

Kieranがaとbのどちらをスノッパ的判断の不当さの直接的な源泉と考えているかははっきりしないが、いずれにせよKieranはbはaをもたらすと考えている⁹。しかし、社会的に優位に立ちたいという動機にもとづいた行動のおかげで、結果的に美的に関連ある特徴を見分ける能力を獲得する場合もあるように思われる。つまり、bがaではなくむしろaの克服——健全な美的判断——につながる場合だ。次のケースを考えよう。

Sは音楽好きを自任しており、友人たちよりも自分の音楽の感性のほうが洗練されていることを示したいと思っている。それゆえSは、友人たちが好んで聴く最近のミュージシャンが耳に心地よいと思いつつも、そうしたミュージシャンが影響を受けたと公言している昔のミュージシャンをあえて聴き、高く評価している。はじめのうちは、Sはそうした昔のミュージシャンを古臭いと感じつつこれが原点であり古典なんだと自分に言い聞かせながら聴いていたが、そうこうしているうちに、その作品が属する様式や聴きどころがわかってきた。

これと似たようなケースは、映画であれファッションであれデザインであれ食べものであれ、およそあらゆる美的カテゴリーに見いだせるだろう¹⁰。

⁹ 徳理論の観点からスノッパの悪徳を示している箇所（Kieran 2010: 254-256）でも、この関係についての考えは維持されている。

¹⁰ 逆にこの種のケースが見いだせないような領域は、当の文化全体がスノビズムに毒されている真正のスノッパワールドの疑いがある。とはいえ、それはここでの話題とはまた別の話だ。

Sの動機は一貫してスノッブ的だが、スノッブ的判断を積み重ねた結果、Sの美的判断は健全なものになっている。この美的判断は（Kieranの基準によれば）正当な美的判断ではないだろうが、しかし美的実践にとって害あるものでもない。それは、美的に関連ある特徴にもとづいて対象に性質や価値を帰属するという美的実践の目的に反するものではないからだ。

ここで重要なポイントは、たとえ健全な美的判断にいたっていない段階であっても、最終的に健全な美的判断にいたるものであるかぎり、スノッブ的判断は擁護可能だという点にある。現段階で健全な美的判断をしているかどうかはさておき、とにかく健全な美的判断につながるようなある種の**成長**があればそれでいいのだ。

定式化しておこう。

擁護可能なスノッブ：スノッブ的判断は、その積み重ねが健全な美的判断につながるかぎり、美的実践にとって害のないものとして擁護可能である。そして、そうした擁護可能なスノッブ的判断をする傾向にあるスノッブは、擁護可能なスノッブである。

Sのケースは特殊なものではない。むしろ、われわれの美的実践の実態に即したものであるように思われる。自分にとってよくわからない新しい美的カテゴリーになじもうとするとき、われわれは、ふつう確立した評価や他人の評価をそのまま鵜呑みにする。なぜそれが良いとされるのかわからないが、とりあえず良いものだと思い込んで鑑賞する。そして、それを繰り返しているうちに、うまくいけば対象の見どころや良さがわかってくる¹¹。もちろん、その動機がスノッブ的である必要はないのだが、われわれが新しい美的カテゴリーになじもうと努力する動機は往々にして不純だ（通であることを示したい、大人びたい、目立ちたい、モテたい、いいね！されたい、友人と会話をあわせたい、ビジネスに役立つ、そろそろいい大人だし嗜んでおかねば、etc.）。

スノッブのなかには美的実践にとって害のないものがあることを示した。次の問題は、そうした擁護可能なものとそうでないものは、外見的にどのように見分けられるのか、だ。

¹¹ このメカニズムをどう説明するかという問題がある。ひとつの回答候補は、認知的侵入の観点からの説明（源河 2016: 20-21）だろう。美的に関与的な性質の多くは、ゲシュタルト知覚において現れる対象の全体論的な特徴である。ゲシュタルト知覚の形成には、認知状態が影響する。評価もまた、認知状態の一部である。したがって、これは良い（あるいは悪い）という知識とともに対象を経験することは、そうでない状態で同じ対象を経験するのとは異なるゲシュタルトをもたらしうる（もちろん、そのようなゲシュタルトの変化と安定化がうまくいくかどうかはケースによるだろう）。これは、成長するスノッブと成長しないスノッブの両方を説明する。成長するスノッブは、他人の評価や確立した評価を鵜呑みにしつつも、それによって対象に対する自身のゲシュタルト知覚を変え、いずれは美的判断の理由になる快を得る可能性のあるスノッブだ。一方、成長しないスノッブは、もっぱら認知的な事柄から得られる快で満足してしまい、うまく対象を知覚すれば得られるはずの快を求めないスノッブだ。

4. 良いスノッブ、悪いスノッブ

4.1. 美的論争と理由づけ

わたしのアイデアは、Dominic Lopes (2017) による美的論争の特徴づけのひとつが、擁護可能なスノッブとそうでないスノッブの外見的区別にそのまま利用できるのではないか、というものだ。説明しよう。

美的論争とは、ある対象の美的性質をめぐる論争のことだ。そこではふつう、論争者がお互いの美的判断に同意していない。Lopes は、美的論争の例として、次のような会話をもち出している。

A: 『ダウントン・アビー』の脚本は洗練されている。

B: いや、そんなことはない。

A: 歌麿のイナゴとトンボの絵は感傷的だ。

B: いや、ぜんぜん感傷的じゃない。

Lopes は、美的論争の特徴づけを 5 つ挙げている。そのうちのひとつは次のようなものだ¹²。

第三に、美的論争はしつこく続く。[……] このしつこさは、美的記述と実質的美的判断が持つ〈理由を与える〉という役割から来ている。美的論争には次のような規範がある。すなわち、「理由を挙げろ、でなきゃ黙っとけ」というものだ。(Lopes 2017: 65)

ここで言われている「理由」は、なぜそのような美的判断ができるのかについての理由だ。美的論争では、自分が同意できない相手の美的判断に対して、なぜそう言えるのかという理由の提示が要求される。しかし、たいていの理由では相手は納得しない。結果として（お互いに嫌気がささないかぎり）美的判断の理由を掘り下げていく議論が延々と続くはめになる。

さて、この特徴づけを踏まえて、害のないスノッブとそうでないスノッブを区別する外見的基準を、次の通り提案しよう。

擁護可能なスノッブの基準：ある人は、しつこく続く美的論争に参加し続けるならば、仮にスノッブであったとしても擁護可能なスノッブと見なすことができる。

ようするに、たとえスノッブであっても、自分の美的判断に同意しない人がいた場合に美的論争

¹² すべて挙げれば以下の通り (Lopes 2017: 64-68)。①美的論争で問題になっているのは、論争者（または論争者が属する集団）の趣味ではなく、鑑賞対象の性質そのものである。②ある美的主張に同意するかしないかは、当人の社会的属性に左右される。③美的論争はなかなか終わらない。これは、理由づけの規範と結びついているため。④美的論争における不同意のケースでは、言語的否認（「いや、そんなことはない」）が適切 *felicitous* な発話になる。⑤美的論争における不同意は、*faultless* である場合がある。なお、これらの特徴づけのねらいのひとつは、美的論争と個人的趣味についての会話の区別にある。たとえば①③④は美的論争にはあてはまるが、個人的趣味についての会話にはあてはまらない。

から逃げずに付き合う人であるかぎりには、美的実践にとって害のない人だということだ¹³。

4.2. 知覚的証明

なぜ、美的論争に参加するかどうか、害のないスノップかどうかの基準になるのか。これは、美的論争の目的を考えればわかる。美的論争の目的は、問題の対象が特定の美的性質を持つことを相手に納得させることにある¹⁴。そして、相手に自分の美的判断を納得させようとする過程で、ほとんど必然的に、健全な美的判断か、あるいは少なくとも健全な美的判断につながる判断が求められることになる。

なぜか。ここでのポイントは「納得」の種類だ。美的な納得は、合理的に筋の通った説明によって達成されるものではない。美的論争における理由づけは、合理的な説明とは異なる機能を持っている。それは、Frank Sibley (1965/2001) が「知覚的証明 perceptual proof」と呼ぶ機能にほかならない¹⁵。

知覚的証明は、ある対象がある性質を持つことの根拠として知覚を持ち出すことだ。たとえば、あるものが青いことの根拠は、人がそれを青いものとして知覚することで得られる。Sibleyによれば、美的性質もこれと同じかたちで根拠づけられる。つまり、あるものが優美であることの根拠は、人がそれを優美なものとして知覚することで得られるのだ¹⁶。

Sibleyによれば、広い意味での批評家の仕事のひとつは、聞き手の知覚を手助けし、それによって知覚的証明を達成することにある。

批評家の目的は、批評家が知覚したものを聞き手自身も知覚することによって批評家に同意してもらえるよう聞き手に働きかけることである。(Sibley 1965/2001: 40)

¹³ これはスノップが擁護可能であることの十分条件であって、必要条件ではないことに注意。それゆえ、この基準を採用したとしても、これを満たさないスノップは即擁護不可能であるということにはならない。実際、美的論争を好まない人は、スノップかどうか、あるいは害あるスノップかどうかに関わりなく数多いだろう。とはいえ、つねに美的論争から逃げているような人は、害あるスノップの疑いがないとは言えない。

¹⁴ Lopes は、美的論争の目的は論争者の趣味を確認することだという立場を検討したうえで、却下している。そのような立場だと、美的論争において焦点になるのが鑑賞対象であることや、美的判断の理由づけが求められることが説明できないのだ (Lopes 2017: 72-76)。

¹⁵ Sibley 自身は、この活動を「理由づけ reasoning」や「説明 explanation」と呼ぶことを明白に拒否しており、かわりに「裏づけ support」という語を使っている (Sibley 1965/2001: 39-40)。しかし、この文脈での「理由づけ」は、Sibley が想定するような知覚的証明の補助を含むのがふつうである。たとえば、Carroll (2009) は批評を「理由づけられた価値づけ」として定義するが、そこで語られている「理由づけ」の内実は、Sibley における「裏づけ」とほとんど同じである。Carroll によれば、記述や分類や文脈化を通して「作品のどこに価値があるのかについて鑑賞者自身が理解・観賞できるようアシストすること、これこそ、批評家とその批評家の仕事の主たる機能なのである」(Carroll 2009 邦訳: 64; 一部改変)。

¹⁶ 美的性質の知覚的証明および Sibley の立場については、源河 (2014) も参照。

美的論争における論争者もまた、これと同じ営みを行っているだろう。論争者は、自分の美的判断に同意しない相手に対してさまざまな「理由」を示してみせることで、なんとか自分と同じ美的知覚を持ってもらい、納得してもらおうとするのだ¹⁷。

そういうわけで、美的論争の論争者は、相手に美的性質を知覚させなければならない。そのためには、ふつうは自分自身がまずその美的性質を知覚していなければならない。これが、美的論争の参加者にほとんど必然的に健全な美的判断が求められる理由だ。

もちろん、スノッブは、不純な動機にもとづいて、自分が知覚していない美的性質を対象に帰属することもあるだろう。しかし、その美的判断についての論争が生じた場合、相手を納得させるにはどうしても対象の美的に關与的な特徴に自分自身の注意を向ける必要がある。結果として、美的論争を続けようとするかぎり、スノッブであっても健全な美的判断につながる判断をすることになる。そういうわけで、美的論争に参加することが擁護可能なスノッブの基準になる。

4.3. スノッブでなにが悪いのか

以上の議論の利点は、正当な美的判断とスノッブ的判断の区別が不可能であるどころか、たとえばあらゆる美的判断がスノッブ的であったとしても——言い換えれば、われわれ全員がもれなくスノッブであったとしても——成り立つ点にある¹⁸。これは、われわれの美的実践の実態にそれなりに即したものだだろう。われわれは、多かれ少なかれ不純で不当な美的判断をしている。

また、この議論は美的懐疑論の攻撃を完全にかわしている。正当な美的判断の存在を根本的に疑う声があった場合には、「スノッブでなにが悪いのか」と答えればよい。重要なのは、正当な美的判断者かスノッブかではなく、良いスノッブか悪いスノッブかだ¹⁹。

¹⁷ そのやり方は、実際には多岐にわたるだろう。たとえば、Sibley (1959: 18-19) は、次の 7 つの方式を挙げている。①当の美的性質を支える非美的性質に言及する。②当の美的性質自体に言及する。③美的性質と非美的性質を結びつけるかたちで言及する。④比喩を使う。⑤ほかの事物や想像上の事例と比較・対照する。⑥繰り返し見せる。⑦声の調子や表情やジェスチャーを交えて話す。

¹⁸ しばしば美学では、美的判断を正しく行う主体として、「理想的鑑賞者（理想的美的観察者、理想的批評家）」という概念が持ち出される。この概念は、美的価値、美的性質、美的真理などの基礎づけに使われるものだ。しかし、そうした主体が実際に存在しうるのかどうかについての疑問や、理想化された存在者を説明概念として採用することについての疑問が根強くある（理想的鑑賞者をめぐる諸説については、Ross (2011) を参照。Kieran (2008) も理想的鑑賞者説に批判的な立場から、徳理論的アプローチを擁護している）。全員スノッブであってもかまわないというこの発表の立場もまた、「真に正当な美的判断者」という概念を必要としないという意味で、同様の立場に与する。

¹⁹ なお、この発表におけるスノッブの良し悪しは、あくまで美的実践にとって害がないかどうかの問題である。スノビズムは道徳的にどうなのかという点については問題にしていない。スノビズムの倫理は、別に論じるべき重要な問題としてある。たとえば、当の美的実践に参加していない（一言で言うと、当の美的カテゴリーに無頓着な）人に対して美的論争とセンス競争をふっかけるようなふるまいは、美的にどうかはともかく、道徳的には非難に値するだろう。また、一部のカテゴリーの美的判断に要求される能力は、文化資本・芸術資本に少なからず依存する傾向にあるので、美的論争はいきおい生まれ育ちの評価に帰着するかもしれない。これが人格攻撃につながれば明らかに道徳的に問題である。

References

- Carroll, N. 2009. *On Criticism*. New York: Routledge. (『批評について』 森功次訳、勁草書房、2017.)
- 源河亨. 2014. 「美的性質と知覚的証明」『科学哲学』 47(2): 87-103.
- 源河亨. 2016. 「美的判断の客観性と評価的知覚」『美学』 67(2): 13-24.
- Kieran, M. 2008. "Why Ideal Critics Are Not Ideal: Aesthetic Character, Motivation and Value." *British Journal of Aesthetics* 48(3): 278-294.
- Kieran, M. 2010. "The Vice of Snobbery: Aesthetic Knowledge, Justification and Virtue in Art Appreciation." *Philosophical Quarterly* 60(239): 243-263.
- Lopes, D. M. 2017. "Disputing Taste." In *Semantics of Aesthetic Judgements*, ed. J. O. Young, 61-82. Oxford: Oxford University Press.
- 長門裕介. 2016. 「スノビズムの舷窓」『フィルカル』 1(2): 204-208.
- Robson, J. 2012. "Aesthetic Testimony." *Philosophy Compass* 7(1): 1-10.
- Ross, S. 2011. "Ideal Observer Theories in Aesthetics." *Philosophy Compass* 6(8): 513-522.
- Sibley, F. 1959/2001. "Aesthetic Concepts." In *Approach to Aesthetics: Collected Papers on Philosophical Aesthetics*, 1-23. Oxford: Oxford University Press. (『美的概念』 吉成優訳、西村清和編・監訳『分析美学基本論文集』所収、勁草書房、2015.)
- Sibley, F. 1965/2001. "Aesthetic and Non-aesthetic." In *Approach to Aesthetics: Collected Papers on Philosophical Aesthetics*, 33-51. Oxford: Oxford University Press.
- Walton, K. 1970. "Categories of Art." *Philosophical Review* 79(3): 334-367. (『芸術のカテゴリー』 森功次訳、電子出版物、2015. <https://note.mu/morinorihide/n/ned715fd23434>)
- Young, J. O., ed. 2017. *Semantics of Aesthetic Judgements*. Oxford: Oxford University Press.
- Zangwill, N. 1995. "The Beautiful, the Dainty and the Dumpy." *British Journal of Aesthetics* 35(4): 317-329.